

ファミリー・ツリーの完成を目指して

吉田 希依

皆さん、「ルーツ」という言葉を聞いたことはありますか。英語で“root”という「根」という意味が最初に思い浮かぶでしょうが、複数形の“s”あるいはカタカナの「ツ」が語尾についている時は、ある人の「先祖」や、社会、文化、民族的「出自」を指します。NHKが2012年度から放送している『ファミリー・ヒストリー』という番組がありますので、芸能人が自分も知らなかった「先祖」との「つながり」を探る、という光景に馴染みがある方は多いかもしれません。あるいは、『ハリー・ポッター』シリーズが好きな方は、主人公ハリーの名付け親、シリウス・ブラックが、「純血」の魔法一族であることを誇るブラック家の家系図を前にして、苦々しげに自分の出自をハリーに語る場面を思い出すでしょう。家族に逆らい勘当されたシリウスの箇所は、家系図から消されています（写真1）。根を張り枝分かかれして、一人一人が葉になり家族が広がっていくイメージから、家系図は英語で“family tree”と言います。しかし、このような例を見聞きしたことはあったとしても、自分自身の「ルーツ」について考えたことがある方はあまり多くないかもしれません。

一方、私が専門にしているアメリカ文学の枠組みでは、様々な背景を持つ人たちが集まってできた国家であるという事情から、特に「民族的ルーツ」が重要だと考えられています。アフリカン・アメリカンの例



写真1__ブラック家の家系図
(ワーナーブラザーズスタジオツアー東京に展示)

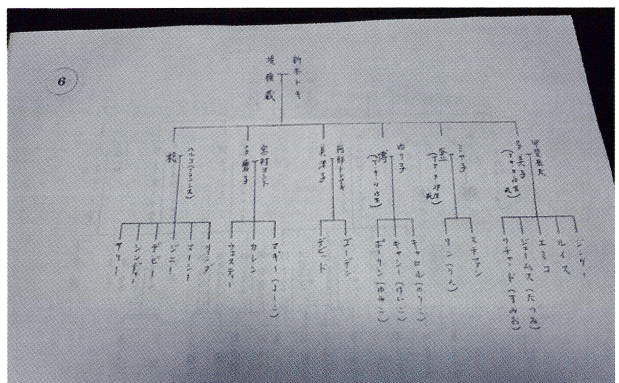


写真2__アメリカ Sakai 家の家系図

でいうと、日本に「ルーツ」という単語を根付かせるきっかけとなった、その名もずばり『ルーツ』というテレビドラマシリーズがありますし、トニ・モリスンという名前のアフリカ系アメリカ人の作家は、「根をおろすということ——礎としての祖先」というタイトルのエッセイで、アフリカ系アメリカ人として、祖先から受け継いできた精神的遺産がいかにか大切なものかについて書いています。アフリカ系アメリカ人の場合は祖先が奴隷として無理やりに連れてこられたという、いわゆる「移民」とは異なる事情がありますが、いずれにせよ何世代か前に祖先が祖国を離れていることから、「アメリカ人」でありながら自分の民族的な出自を強く意識する環境にあると言えるでしょう。もちろん、アメリカ人に限らないことではあるでしょうが、特にアメリカの、いわゆる民族的「マイノリティ」と呼ばれる人々にとって、「自分とは何者か」という非常に根源的な問題を考えるうえで、先祖とのつながりがとても重要な要素であることは間違いありません。

以上のような背景事情を導入としたうえで、2023年春に私が個人的に交流した、日系アメリカ人の家族のお話をいたします。私の夫は熊本県上益城郡の出身ですが、アメリカに親戚がいる、という話は以前から聞いていました。はるばる、その方たちが熊本を訪ねてきたのです。Lynn Sakaiさん、弟のSteve Sakaiさん、Steveさんの息子のRobert Sakaiさんの3人は、上益城郡に散らばる一族と直接交流がある仲のよい関係というわけではありませんが、自分たちの祖先が育った土地を見てみたい、血のつながりのある人々と会い話をして、そして家系図を完成させたい、という強い思いがあつての来訪でした。門外漢の私には詳しく分からないのですが、LynnさんはOregon Health & Science University所属の生化学研究者で、マルファン症候群に見られるタンパク質の形状を新しく発見したという大変な功績を持っている方です。2023年3月に福岡で開催された第87回日本循環器学会に招かれ講演をし、その後熊本に移動して来られました。

Lynnさんは日本語の会話がかなり理解できる様子でしたが、地元熊本の通訳の方と一緒に、所縁のある家、土地を方々回られてきたそうです。3月14日に上益城郡のいわゆる「本家」を訪ねてこられた際、夫の父に連れられ、夫と私も昼食の席に加わりました。Steveさんは写真家で大変おしゃれな方で、第一声の“Can you speak English?”という教科書的なフレーズに始まり、その後は互いの家族や日常的な話題について、気さくに話してくれました。Robertさんは高校の事務をされているそうで、文学通でもあり、私の博論の内容や授業で扱っている

作品のタイトルなど、熱心に尋ねてくれました。そしてLynnさんの、ぜひアメリカに来たら声をかけてほしい、今後も交流をつなげていきたい、という真摯な言葉が胸に響いたことを覚えています。アメリカに自分たちのことを気にかけてくれる人々がいる、という発想にとっても温かい気持ちになりました。

Lynnさんたちと熊本の境家のつながりは、何世代か前にさかのぼります。境平三郎氏（嘉永6年～昭和18年）の第1子境市松氏は上益城郡の境家を継ぎ、その弟にあたる第6子の境権蔵氏が単身でアメリカに渡り、アメリカ境家の祖となるそうです。Lynnさんたちとお会いしたのは、市松さんのひ孫、国嗣さん宅でした。Lynnさんたちは、単身でアメリカに渡り苦勞をして一族の礎を築いた祖父の権蔵氏を大変尊敬している様子でした。また、家系図の作成に意欲的で、その場にいる一人一人の写真を撮ったうえで、今後の写真の共有方法を真剣に相談していました。事前のメールのやり取り時に、作成中の家系図のデータが圧縮して熊本境家に送られてきており、空いている箇所や続きをできるだけ埋めてほしい、という依頼があったほどの用意周到さです。一人、また一人と遠い親戚にあたる人が座に加わるたび、分厚い家系図のページがめくられ、今来たのはこの方の子孫でここに書かれている人だ、という説明が何回も繰り返されていたのは、とても印象的な光景でした。

今回のお話特に結論というものはありませんが、ルーツ、あるいはファミリー・ツリーにまつわる個人的な体験談として、ぜひ共有できたらという思いから執筆させていただきました。私は日本の結婚制度、あるいは「家」制度についてしばしば考えていますが、個人的な主義や信条を越え、「今」「ここ」にいる人間として、自分を育ててくれた人々の様々な思いを尊重し受け継いでゆきたい、という気持ちに変わりはないことをあらためて認識しました。遠い、遠い親戚と

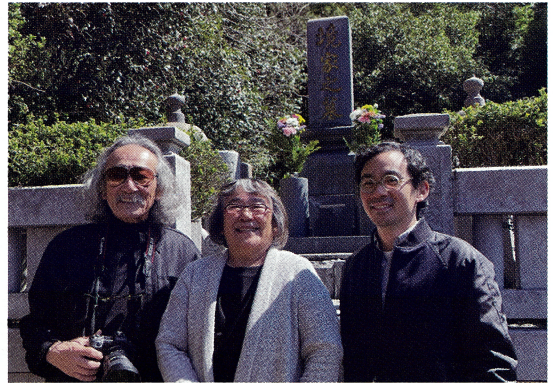


写真3 __境家の墓前にて
(左より Steve さん、Lynn さん、Robert さん)



写真4 __持ち寄った写真を見ながら、人や場所を特定する様子

して所縁のある方々と直に会うことができ、人と人とのつながりを肌で感じた本当に貴重な経験でした。こちらの文章を読んでもくださった皆さんにとって、何らかの刺激になれば幸いです。

最後になりましたが、執筆を快く許可してくださったLynn Sakai氏、Steven Sakai氏、Robert Sakai氏、並びに熊本境家ゆかりの皆様にご感謝の意を表するとともに、またお会いできる時を楽しみにしています。



写真 5 __境家本家前にて